

収め残しの一編

— 作品 「アンコロン」 —

戸塚 惠 三

1

偕成社版『庄野英二全集』（全11巻）の最終回配本は、昭和五十五年三月であった。

わたくしは、作家の前川康男氏（一九二一—二〇〇二）とともに、著者庄野英二（一九一五—一九九三）から直接の依頼を受けて、この計画立案の当初から作業に当たっていた。（結果的には、全巻の「解題」を担当することになった。）

全集の完結後、なおわたくしの手許には、ゆうに単行本一冊分相当のエッセイや随筆群が残された。それらの一点一点をあらためて薄い台紙に貼り合わせ、いくらか整序した上で大阪在住の著者宛に郵送した。台紙の数は全部で94枚あった。

後日これらが、もし単行本となる日があったならば、この一篇こそは絶対に外すわけには行かないと考えて来た小品があった。それが、ここに取り上げる「アンコロン」である。

貼り合わせて四葉のその紙片を、忘れないようにしようとして取り分けて、しばらく別の紙袋に入れておいた。ところが、あろうことか、この肝心の一篇のことを、すっかり忘れてしまっていた。

くだんの文章群はと言えば、昭和六十二年七月に単行本化され、『新しい靴』と題されて大坂・編集工房ノア社から刊行された。その時点においてもなお、わたくしはこの忘失に気付いていなかった。

2

アンコロンは、インドネシアの民族楽器の名である。(アンクロンとも表記される。)

柴田南雄のまとめた『楽器への招待』(新潮文庫)によれば、それは、「もっとも竹細工らしい繊細さを見せ」、「打楽器の一種だが、竹筒の共鳴をも利用している点がユニーク」、「日本の庭の、いわゆる添水唐臼そりずからうす一名猪おどしの、竹筒がポコンと石を打つあの音が、高低さまざま、にぎやかに鳴り出すとしたらアンクルンの合奏に近い感じになるだろう。」と、いとも懇切丁寧な解説がある。まるで演奏現場に居合わせるかのような心愉しさがある。さしづめ、京都・詩仙堂のあの「鹿威しししおど」の交響的連打のおもむきか、などと勝手に思い描いていた。

引き換え、庄野英二「アンコロン」は、かの森鷗外のひそみに倣えば、「よろこびもかなしびも知る」(『うた日記』「扣鈕ほたん」) 思いが、深く内にこもる佳品である。

台紙の四葉はつぎのように始まる。

初出は、雑誌「室内」(工作社) 昭和四十二年十一月号である。

ジャワにアンコロンという竹だけで作った楽器がある。

私もバンドンの近くのブゲンデイ湖のほとりで村人の演奏するのを聞いたことがある。

ブゲンデイ湖は景勝の地で、近くの山の上にニャンプランという観光ホテルがある。

ホテルの宿泊者のために、村人たちが出張してアンコロンの演奏を聞かせてくれる。

竹のわくの中に、よく乾燥させた竹筒を、二、三本つるしてあるだけの簡単なものだが、それを左右にふると、竹がふれあひ、響きあって、とても美しい木琴よりも柔かく澄みきった音を奏でる。

この冒頭部のかぎりでは、行きずりの素朴で淡泊な一印象であるが、この印象が、ついで著者自身の心に呼びさましたものが、そのかみの創作長編『星の牧場』（理論社、昭和三十八年刊）となり、そこから更に、一読者が実際に竹筒を調達、苦心の末にアンコロンを試作した話題へと引きついで、そうして最後、劇団民藝が東京・紀伊国屋ホールで公演した「星の牧場」（小山祐士・脚色、若杉光夫・演出）初日の舞台がはねた後、会場ロビーでその読者と「初対面のあいさつをかわした。」と結んでゐる。

四百字詰原稿用紙にしておよそ三枚半の小品ながら、表にあらわれている軽妙さの底いに、この『星の牧場』に流れる心の痛みをも感じるがゆえに、繰り返すけれども、この小品に収録必須の思いを強く寄せたのである。

3

前述した『庄野英二全集』の、その第11巻に収めた自筆年譜昭和十七年の項は、次のようにある。今回の召集は、昭和十四年の中国東北部について二度目の召集であった。

昭和十七年（一九四二年） 二十七歳

七月七日、ジャワ俘虜収容所員に任命され、七月十五日大阪駅を発つ。メナド、マカッサル、スラバヤを経てジャカルタに到着したのは九月初めのことであった。中部インド洋湾チラチャップのキャンプで勤務。

戦後の昭和二十二年、戦時のこの前歴により、庄野英二はBC級戦犯容疑者扱いを受けて、巣鴨プリズンに拘留された。

この間のことは、実弟である庄野潤三（一九二一—二〇〇五）の作品「相客」（『静物』所収）に詳細に描かれている。更にまた『庄野英二全集』第9巻の「月報」に寄せた一文の中でも触れている。「兄が見る影もなく瘠せて南の島からわが家へ帰り着くのはそれから十年後である。だが、本当の意味での『戦後』が訪れるまでには更に大きな苦しみを乗り越えねばならなかった。」（「軍隊と兄と『ロッテルダムの灯』」とあるのがそれである。

この、乗り越えなければならなかった「更に大きな苦しみ」とは、前記の巣鴨プリズン拘留を指しているにちがいない。

4

同じ「昭和十七年」をその発行年とする、今一冊の画信集がわたくしの手許にある。

著者・明石哲三、発行所・鶴書房の『南方繪筆紀行』である。

巻頭に斯界の両著名人―岸田國士、熊谷守一―の序文をかかげ、奥付に旧日本陸軍軍政部当局の承認番号が付されている。その一節をあげて、庄野英二の精神の位相との対比としたい。

「バゲンディ湖のアンコロン」として、次のような記述がある。

私はアンコロンの音楽をききに、バゲンディ湖へ出かける。

全くみすばらしい景色の中から、どこからともなく小砂利を踏んで乞食のやうにみすばらしい女の子と男の子があつまつて来て、たのみもしないのに竹製の樂器をならしはじめる。

「うるさいことだ」と思ふ心をかき消されるやうに、このきたならしい者たちは、旅のものをめがけて集

つて来る。然しその手から、玉をころがすやうな美しい大小の音のとけまじった澄みわたったオーケストラがきかれるのである。(以下略)

戦時下統制を視野に入れても、なお、アンコロン奏者に対する両者のまなざしに隔たりのあることは否めない。

庄野英二の初期短篇「チラチャップの鳩笛」(『絵真の空』所収)の中に、殆どがオランダ国籍者八千人からの収容者の銘名票を作成する激務のさなか、「私の父よりも年老いた者のカードが出てきた時などは心が曇った。」(原作・16ページ)の一句がある。この述懐のうちに、真率にして深切なる彼の立ち位置はあった。

5

収録の忘失をなげくことから始めた一連の文章の締め括りとして、わたくしがひたすらに念じることは、やはりこの珠玉の「アンコロン」再録実現である。

現段階ではいまだ仮称でしかあり得ないけれども、時宜を得て〈庄野英二アンソロジー〉を編むの機ありせば、この一篇をまず巻頭に置きたいと思う。

そして併せて、これは新規の要望としてだが、既刊の一書中の小品「ロツテルダムの灯」も是非えらび出したいと思う。

機内、たまたま乗り合わせたイギリス兵士(朝鮮戦争で負傷の帰休兵と分かる。)の、頑なに心開かぬ面差しを描写した作品であった。初めてこれを読んだ時、咄嗟にチャーホフの短篇「グーセフ」(神西清の名訳を忘れない)に通うと思つたのであった。

折も折、海彼イタリア・ジェノヴァの一書肆から、日仏お二人の共訳に成るフランス語版『星の牧場』



(Le pâturage aux étolles) が上梓された。(本年六月)

前年の五月、巻末に添えるべく執筆の依頼を受けていたわたくしの後書「思い出の『星の牧場』」(10枚)も
仏訳掲載されている。

この後書の中に、庄野英二がかねてよりの信条とする言葉を引用した。みずからの作品が、「童話と呼ばれ
ようが、童話と呼ばれなかるうが、作者は頓着していない。夢多き年少の読者をはじめ、醇乎たる詩心涸くこ
とのない読者にゆくりなくめぐりあえるならば幸いである。」と記した一文を。

フランス語が読めないわたくしには、これが、後書のどの辺りにどのように訳されているかがつかめない。
それが何とも心落ち着かなくさせるのである。

本年は、奇しくも、創作『星の牧場』が刊行されて六十周年の節目に当たっている。